

ヤーコプ・グリム「講演『郷愁について』の概要」

Jacob Grimm, Auszug aus der Rede über das Heimweh.

Göttingische Gelehrte Anzeigen 1830. st. 201. s. 2001-2006.

稲 福 日出夫

訳者まえがき：

以下に訳出するのは、ヤーコプ・グリム（1785-1863）がゲッティンゲン大学でおこなった就任講演の概要である。就任講演は、1830年11月13日におこなわれた。その講演の概要を、ヤーコプは、みずから執筆し、同年の「ゲッティンゲン学報」第201冊（Göttingische Gelehrte Anzeigen 1830. st. 201.）に発表した。この概要は、彼の『小品集』第5巻に収められている。Jacob Grimm, Kleinere Schriften, Bd. 5. Hildesheim, 1991, SS. 480-482.

ところで、ヤーコプの就任講演そのものは、ラテン語でおこなわれており、それも『小品集』第6巻に収められている。そのラテン語の講演録は、ヴィルヘルム・エーベル（Wilhelm Ebel）によってドイツ語に翻訳され、公刊されている。Jacob Grimm, De desiderio patriae. Antrittsrede an der Göttinger Universität, gehalten am 13. November 1830. Faksimile-Ausgabe mit einer Übersetzung und einem Nachwort, herausgegeben von Wilhelm Ebel (Bärenreiter-Verlag Kassel, 1967)。それに依って、わたしは以前、ヤーコプのこの就任講演の邦訳を試みたことがあった（『沖縄法政研究』第4号、2001年）。その際、ヤーコプ自身の講演タイトルである *de desiderio patriae* を、エーベルの翻訳に附せられたタイトル *Über die Heimatliebe* に倣って「郷土愛について」とした。ところが、「ゲッ

ティンゲン学報」に発表されたこの概要では、タイトルは *Über das Heimweh* となっている。辞書と首っ引きで読むと、懐郷病・ホームシックのことであり、やはり「郷愁について」ということになるのであろう。概要そのものはヤーコプ自身によって書かれたものである。それに関しては、たとえば、フレンスドルフはこう記している。「正教授になることに對し、当時まだ存在していた義務として、就任講演をおこなうことと計画書を提出することがあった。が、ヤーコプ・グリムは、1830年11月13日に、その責務を十分に果たした。彼ヤーコプは、*de desiderio patriae*, すなわち、郷愁について (*über das Heimweh*) という講演をおこなった。その講演をドイツ語に訳した短文の概要を、彼は、『ゲッティンゲン学報』第201冊に発表した (geben)」。F. Frensdorff, *Jacob Grimm in Göttingen*, (Dieterichsche Verlag, Göttingen, 1885) S. 22. 問題は、概要のタイトルもヤーコプみずから附したのか、それとも「学報」の編者によるものなのか、である。この辺りについて、たとえば、エーベルは、さきのドイツ語訳のあとがきのなかで、次のように述べている。「就任講演そのものは、まさに『*De desiderio patriae*』を主題にしている。これは繰り返し——本から本へ (*von Buch zu Buch*) ——言い伝わっているような「郷愁について (*Über das Heimweh*)」と訳されるべきではなく、『郷土愛について (*Über die Heimatliebe*)』あるいは『祖国愛について (*Über die Vaterlandsliebe*)』と語られるべきものである。そのことは、単に表紙だけでなく彼の講演録の一頁以上を読むひとなら誰でもはっきり見極めることができる」。Wilhelm Ebel, a. a. O., S. 23.

去りがたい思いで、しかし、兄弟に対するカッセルでのやりきれない処遇に対する決然たる思いで、生まれ育った母国ヘッセンをあとにしてゲッティンゲンにやってきたグリム兄弟。そこでの就任講演のタイトルの原意は何であったのか、やはり興味深いものがある。ちなみに、ヤーコプは、その講演のおこなわれた2日後の11月15日に、ラッハマン (Lachmann) に宛てて手紙を書いている。「郷愁という言葉のもとに (*unter dem desiderium patriae*)、わたしは秘かに (*heimlich*)、故郷ヘッセンへの思いも含めて考えておりました。しかし、講演は、主として、ドイツとドイツ語 (*Deutschland und deutsche sprache*) について詳しく述べるという内容でありました」。Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm

mit Karl Lachmann, herausgegeben von Albert Leitzmann (Verlag der Frommannschen Buchhandlung, Jena, 1927) S. 552.

なお、『小品集』第5巻480頁の、この講演概要のタイトルには*印が附せられ、欄外に、以下のような編者註が記されている。

* [この講演概要は、内容からいって第1巻に収められるべきものであるが、第1巻を編集する際、そのことに気付かなかった。そこで、この巻に収録することにしたい。]

講演『郷愁について』の概要 (1830年)

11月13日、グリム教授の就任講演「郷愁について」が、一般の聴衆も集めて催された。その講演の冒頭で、講演者は先ず、「人間にとって快適に暮らせるところなら、そこがその人間の祖国である (da wo es dem menschen wohl ergehe, sei sein vaterland)」という言い古された決まり文句が誤りであることを提示し、祖国愛 (vaterlandsliebe) というものは、神聖でかつ、各人の胸の奥深くに刻み込まれた感情であるから、その愛は、われわれが生国 (geburtsland) で見舞われた苦悩や災禍によって弱められるどころか、かえって強められるものであることを証明した。その後、彼は、われわれが父祖の地 (der väterliche boden) からもたらされる特有な恩恵について話を展開していった。

郷土から受ける恩恵は、他の何物をもってしても代えることのできないものであり、抑えがたい望郷の念が、一たび国外へ移住した人々を、郷土 (heimath) に引き戻すのである。郷土においてこそ、われわれのあらゆる生活環境にとって穏やかな安らぎが形作られ、そして、その安らぎからまた、あらたな仕事や計画への意欲がわいてくるのである。郷土においてこそ、われわれの歩みは、しっかりと地についたものとなり、異郷にあっては、足もすべりがちである。われわれの想像力 (phantasie) は、ごく幼い頃から祖国の伝説 (sage) や歴史 (geschichte) によって育まれ、消し難い追憶もそうしたものと繋がっている。お墓さえも、先祖の遺徳に見習って努力するようわれわれを鼓舞し激励するのである。

しかし、共通の言語をもっているということ以上に、祖国愛という絆が明らかに

なる場面はほかにない。その点が講演の主たる目的であった。そこで講演者は、高地ドイツ語 (hochdeutsch) の方言が、われわれの民族全体に伝播し普及することによって、国内の各地方の境界を越えて、そうしたことに頓着せずに、どれほど「ドイツ性 (deutschheit)」の意識・自覚が呼び起こされ、高められ、強固に育まれていったか。また、もしドイツが、現在、練り上げられた書き言葉を欠いているとするならば、すべてのドイツ人が、どれほど「郷愁 (heimweh)」の念に襲われることであろうか、といったことを中心に話題を展開していった。

はるか昔に、われわれの民族のさまざまな語幹 (stamm) は、一族的に似たような関係というには、相互にかなり孤立した状態であった。というのも、各語幹の方言 (mundart) は、感覚的にあまりに多種多彩なものであったからである。或る民族が精神的に興隆することや政治的に堅固になることは、その民族の言語の成長・発達と、内的に相互に関連しているように思われる。言語のもつ感覚的な威力はしだいに衰退し弱められていく、というのは本当である。言語は、多くの個別的な長所や技巧 (vortheil) を捨て去っていく。が、まさにそれに依って、言語の一般的な伸張・発達が起こってくるのである。

世界の歴史において或る偉大な役割を与えられていた各々の民族は、かつての狭小で緊密な部族や血縁による絆から解き放たれ、より広域な統一へ向かって努めなければならなかった。このことは、今日の多くの民族を例にとって説明できるだろう。が、とりわけ、ドイツの歴史に照らしてみれば明らかになる。

部分的には優れた言語能力をもっていたかつての古ドイツ語が滅亡した後、しばらくの間、高地ドイツ [つまり、南部ドイツ——訳注] 言語 (dialect) と低地ドイツ言語が、ほとんど互いに均衡を保っていた。が、13世紀にはすでに、高地ドイツ言語が明らかに優越しているという主張が起こってきた。もし、われわれドイツ国民の政治的運命が、それを抑制する要因をなにももたらさなかったとしたならば、おそらく、当時すでに低地ドイツは、高地ドイツによって圧倒されていたのだろう。かつては、あちこちと交代はしていたが、それでも常にドイツの中心部にその居所をもっていた帝位が、その後数世紀にわたって、或る家系に受け継がれることになった。その王家は異郷の様々な民族のうえにも君臨し、そうした外来の利害関心によって、多方面にわたって、幾重にも活発になっていった。しかし、純粋なドイツ語が、

プラハでもウィーンでも豊かに成長するという事はなかった。そして、当時ドイツ人の内面生活の最深部を捉えていたのは宗教改革であった。が、それをオーストリアが完全に排除したことによって、[異民族支配の——訳注] 不均衡は、さらにはなはだしいものとなっていった。その間に、まさにルターのもつ優れた言語能力、その強大な影響力 [ルターのドイツ語訳聖書は高地ドイツ語で書かれた——訳注] が、高地ドイツ語の支配を新たに刺激し促進して、最終的に、決定的となっていった。この時点から、低地ドイツ語の衰退は、宿命的に免れないものとなった [高地ドイツ語が標準ドイツ語として成立していった——訳注]。

幾人かの文筆家が、低地ドイツの方言が屈服したことを嘆き悲しみ、さらには、あるいはその言語の再興も可能であると思ったとき、それは、全体の歴史的情勢にかんして判断を誤っているというだけでなく、われわれの民族が統一されるという何にもまして大切な価値について、臆病・無気力となり判断を誤っている、ということが問題である。低地ドイツ語は、なるほど、まだ然るべく正当に評価されているとは言い難い影響を、個々に且つそっと気付かれることなく、高地ドイツ語の文語のうえに及ぼしており、高地ドイツ語のもつしなやかな文体に、共に作用しあっている。しかしながら、その後、低地ドイツ語は、公的な発言や、高貴さや威厳が重要となってくる場面で用いられる言葉としては、もはや適さなくなったのである。

高地ドイツ語に関していえば、それによってその他のドイツ諸地方の方言が抑制されたというだけでなく、他の困難な諸問題も克服されたのである。キリスト教や教会での慣習を通じて、初期の頃から、或る外国語すなわちラテン語が、われわれのもとに持ち込まれた。そして、中世全般を通じてラテン語が多方面にわたって頻繁に使用されたことが、土着の言語を育み高く花咲かせることに對し根本的な障害となった、ということを誰が否定できるだろうか。なるほど、ラテン語が使用されることによる有益な側面も見てとることはできるであろう。が、それでもやはり、その利点は、それよりはるかに深刻な欠点のまえで消え去ってしまうのである。それにまた、その頃使われていたラテン語は、古代の純粋なラテン語ではなく、むしろ、古代ラテン語の良さが損なわれたぎこちないラテン語であった。そうしたラテン語は、われわれを喚起し鼓舞することもなく、実りをもたらすことなどほとんどなかった。文芸復興 (das Wiederaufleben der classischen Literatur) とともに、

事態にある変化の兆しが見られるようになった。が、それにもかかわらずまだ、母語 (die Muttersprache) が育っていくための良き環境、それに向けての顕著な変化が現れてきた、というわけではなかった。古典語の精神に精通し、それに造詣の深い人々は、古代ラテン語で著され保存されている著作群が、計り知れないほど優れていることを感じ取っていた。そうした学識のある人々が、彼らの、生まれながらに用いていた言語を、たとえそうした言葉が価値に乏しく疎かにされたって仕方がないと思っていたとしても、ともかく、彼らにとって生来の言葉を使い始めたのであった。

ところで、ラテン語で書かれた多数の書物や詩、また書簡が、たんにドイツ一国だけでなくヨーロッパを形成する全土において、もっとも深遠且つ覚醒された頭脳集団によって書き著されていた。そのことをよく考えてみるならば、なるほど、いたるところで新しく芽生えてきた才能を披瀝・消費することに感嘆することもできる。が、それでもやはり、もっとも優れた天賦の才が浪費されていること、また、彼らにとって重要で切実な且つごく自然な手段・やり方をとらずに [つまり、母国語を使用せずに——訳注]、思い上がって、そうした手段を払いのけるという自己放棄 (eine Selbstenttäuszerung) をそこに見てとることもでき、それを残念に思うのである。こうした文筆家たちは、外見上優秀であるとの賞賛を得ることによって、本質的に優れた多くのものを捨て去ってしまったのである。後世の人々にとっては、彼らの名声は何等の意味ももたなかった。というのも、彼らの作品は、ほとんど仕事上の義務として読まれるにすぎないものとなり、[ラテン語を使用しているという——訳注] 外観の魅力のすべてを、ほとんど失ってしまうことになった。

その際、ラテン語とドイツ語の関係それ自体が問題となっているわけではない。ドイツ語と比べてラテン語は美しく、響きも心地よく、簡潔である、と言われている。そうした点を、あるいは、ラテン語の良い点をさらに多く列挙し、それらを認めたって構わない。それによって、われわれの母国語のもつ力や豊かさ、さらには個々の単語の柔らかさが、少しも損なわれることはないのである。しかし、肝心なことは、内面的に熟成されたまろやかさという点で、ラテン語は、古来のドイツ語と同様な味を生みだすことができるかどうか。われわれが内面で思っていることを過不足なく十分に表現することができるのは、どちらの言語に依るのか、それが重

要なのである。息が途絶えてしまった或る言語が [つまり、ラテン語が——訳注]、新たな着想のもつ十分な温もりを、つまり、各々の心に浮かんでくる考え方のなかに潜む無理のないのびのびとした本性・性質 (Natur) といったものを、しっかりと捉えることができるのかどうか。仮にそれが可能だとして、果たして、そうした言語が、今日の世間一般にひろく浸透し、大衆の心を感動させることができるのかどうか。それに対する返答がどうであろうと、すべての人々が同意する解答を見出すことは難しいだろう。しかし、前世紀中葉以来、土着の言葉で書かれたドイツ文学は、共通の言語をもっているわれわれすべての国民 (alle Völker) のあいだの結びつきを、固くしっかりとした持続的なものにするために限らない貢献をもたということに反対する者はなく、容易に意見の一致をみるのである。それ故、ドイツを支え維持するということは、言ってみれば、ドイツ語の保護と育成にすべてを注ぎ込むことを意味することでもある。

しかし、これまで実際に行われてきたラテン語の使用を制限することによって、これまで培われてきた根本的研究が損なわれはしないかといった不安があるだろう。が、それが空虚な恐れや不安であることは、きっと時が経てば明らかになるだろう。さらには、われわれはラテン語と同様にギリシア語も他の目的のために [つまり、話したり書いたりして——訳注] 利用することはないが、しかし、われわれの学問的形成のうえでギリシア語のもっている影響力は測り知れない程大きいのである。さらに、奴隷のように見習い模倣するというよりも、絶えず観察し考察し続けることによって学び理解するならば、[ラテン語などとは——訳注] 比較にならないほど古き言葉 [土着の言葉、母国語のことか——訳注] から、われわれは、もはや学ぶものがないとでもいうのだろうか。あるいは、われわれは、ラファエルの像 (ein Bild von Raphael) を理解し研究するために、それをどうにかこうにか模写することができるままでいいのだろうか。

(2005年8月20日)